

# HYDRANGEA

実験小説

ハイドレインジャ

第1部



## ハイドレインジャ 第1部

### <その1>

それは6月のある日、早朝4時、夜明け前まで降っていた五月雨は上がっており、俺はいつも通りウォーキングに出た。

俺の家は世田谷区砧8丁目に在る。仙川という名の川の河岸段丘と言っていい、少し小高い場所に建つ、一応ささやかな庭もある家だ。砧8丁目は完全な住宅地だ。夏至前の午前4時、すっかり明るくなっているが、近隣の人はまだまだ夢の中というところか。7丁目方向、東宝のスタジオへ通じる道周辺には人っこ一人いない。クルマもほぼ全く通らない。

俺はこの道が好きだ。Beatles のラスト・アルバム Abbey Road のジャケット写真の通りと少しだけ似ている。

雨上がり、なにしろ蒸す。日も差してきた。

俺は寒さより暑さが身に堪えるほうだ。早朝ながら、そして T シャツ・短パンといういでたちながら、歩き出して数分で噴き出してくる汗を拭いつつ、「あ〜、不快だ。夏至どころか、早く冬至が来い」などと独りごつ。

しかしどうだ。

近隣のお金持ちの家々は今多くがその庭や玄関前を紫陽花で飾っており、そのひとつひとつの色彩、形状が異なっていて、なにしろ美しく、また「和して清し」の清々しさを湛えているから、蒸し暑さの不快さは軽減されるようだ。

7丁目、ウルトラマンの円谷プロが在った辺りを通ると、必ず俺は「ウルトラセブン」のテーマ曲のイントロ・メロディーを口笛で吹く。

### 実験・新形態小説 ハイドレインジャ

私の地元を舞台として、小説をものしたいと思っています。

何が「新形態」かと言うと、この小説の語りを録音し、効果音とオリジナル曲を挿入、さらにバックグラウンドには私が好きな地元の<山河>、街風景が動画、静止画で常に映し出されている、という点です。

むろん、形式としては真新しいわけではありませんが、小説、語り、挿入音楽、映像が全て一人の作者（編集は K に頼ると思いますが）によるというかたちはおそらく他にないものだろうと思っています。

小学生の頃、會津の田舎にいてリアルタイムで視聴し、胸躍らせたこのブラスの前奏。半世紀近くを経て、夢を見させてくれた映像制作会社が在った場所を歩いている自分—

そして子どもの頃から十数年後、このオープニングテーマ曲を作った作曲家と、あるアニメで共に音楽を担当する立場になるという信じられない僥倖に恵まれた自分—

その過去と今を、ほんの少しではあるが、いつも省み、また想うのだ。

その子どもの頃、爺さん婆さんの早起きに畏れ入ったものだった。老人は眠くならないのかとすら疑った。今自分がとうとうその老人の域に達し、午前3時には起きて、4時には歩いていることに苦笑する。そして老人の早起きは、一回の眠りの時間が短くなってしまふことによる睡眠パターンの乱れのせいであることも身を以て理解しているのだ。

「雨が止む」ことを英語では「the rain lets up」という。

「let up」とはなんとという優しい響きだろう。大学生の時この idiom の意味とその音に感激した自分を思い出す。

「let は語源的には leave に近いんだっとなあ。『放っておく、自然の成り行きのままにする』というニュアンスだ。let up は、雨が fall down していたけれど、なりゆきで up、つまり<上がった>状態になることなんだ。」

そう知識をブラッシュアップして、ひとり満足する。

「ああ、Let up on me, now, please, babe」なんていう出だしの歌詞の歌を作ったなあ！」

雫をのせた青紫色の紫陽花を間近に見ながら、俺はその歌 The Lilaceous Rain を歌い出す。

「let up on は、誰かにキツイ態度をとっていたのを<緩める>という idiom だ。雨に打たれていた者が、天に赦されて、雲間に日差しを見るようなイメージだ。なんというすてきな言い回しだと感激した 30 歳くらいの自分を思い出すなあ。」

俺は東宝スタジオを右手に見て仙川を渡る橋の辺りでイヤフォンを取り出し、YouTube で作った自分が好きな楽曲リストを「シャッフル」でかけ始めた。世田谷通りを横断し、仙川沿いを歩く。

左手の、柳家喬太郎が小学校低学年まで住んでいた大蔵団地は、今ほぼ全棟が取り壊され新しく賃貸マンションとなりつつあり、一帯が整備され、また仙川の河岸段丘の木立もしっかり残されているので、歩いていて気持ちの良い土手道となっているのだ。

映画『七人の侍』のロケ地のひとつだったとはとても思えないほど変貌してしまったけれど、自然と住宅地の調和ぶりとしては及第点をつけていいのではないかと俺は思う。

しばらく歩くと、左側に新しくできた、河岸段丘をトラバースして上る道路がある。そこは近隣住民くらいしか存在を知らないから、滅多に人やクルマに出くわさない。ましてや早朝、緑濃い木立に囲まれた坂をたった独り歩いていると、時刻に似つかわしくない曲が始まった。ELO(Electric Light Orchestra)の Evil Woman だ。

ピアノとストリングスによる間奏が終わり、シンセサイザーによる、フェイザーがかかったストリングスのフレーズがある。そのメロを俺は口笛で同時に吹いた。そして2分足らずで曲が終わった時、俺は坂道の終点大蔵3丁目の丘の上に辿り着いた。

すると、「ふふふっ」という笑い声が背後で聞こえたのだ。

振り向くと、四十代後半くらいの、ジョギング・ウェアをまとった女性が俺をにこやかに見つめているではないか。

## <その2>

俺は戸惑うばかりだった。

そりゃそうだ。

声は発せず、表情だけで、何がおかしいのか、あるいはなにゆえの friendliness なのかその女性に訊く。

「ごめんなさい、突然に！」

女性はにこやかなまま詫びた。

「Evil Woman でしたよね、歌ったり、口笛で吹いていたの。」

俺は目をパチクリさせて、「え、ええ」とだけ言った。

「ELO の。私の好きな曲でしてね。」

「ああ、そうですか。」

俺は合点が行きつつも、事態の唐突さに心がまだまだ乱れていた。

「Hey, hey, hey, hey って歌われてから、ストリングスの高い C の音が口笛で出せなくて、その音がなんだか切なくて。」

女性は眉と目尻を下げ、口を閉じてスマイルマークのような顔をして言った。

「その後、I thought I saw love smiling in your eyesの歌詞、とてもスムーズに唄われて！あら、この人、ちょっと日本人かしら、なんて思ったりして。」

「はあ。」

俺は意味なく頭を掻いた。そしてその女性が相当の英語話者であることも知った。

「ごめんなさいね、失礼ですよ、見知らぬ方にこんな親しげに話しかけてしまって。」  
彼女はそう詫びて、一旦ジョギングを再開しようとしたのだが、すぐ振り返ってこう言った。

「あの、私は藤原凜（ふじわら・りん）と申します。『りん』は古くも新しくも響く名前ですけど、漢字は、<りん>とした空気、とかの凜です。成城の父母の家に最近戻ってきて、以来ジョギングや散歩でこのコースを使って。もしかするとまたお会いするかもと思い、一応自己紹介させていただきました。」

「ああ、それはご丁寧に。」

俺は初めてにこやかな顔をしながら返事をした。

「私は野澤熊（のざわ・ゆう）と申します。『ゆう』はなんと<熊>なんです。熊の音読みです。」

「まあ、珍しい！」

凜は本当に驚嘆している表情で言った。

「ドイツ語圏なんかではオオカミ、wolf を男の子の名前につけるとは聞いていましたけど。」

「ああ、Wolfgang ですね。Wolfgang Amadeus Mozart とか。」

「そうそう！狼戦士で神の愛（Amadeus）を受けたモーツァルト！」

凜は嬉々としている。

「私の場合は、父が熊野信仰を持っていて。あの紀州・和歌山の。出身は會津なんですけどね。ドイツ流で言えば、B r、あるいはB rgang かな。なにしろ子どもの頃からみんなにクマとかクマ公とか言われて、散々です。」

「まあ、おもしろい！」

凜はその後の話も期待する表情を見せている。

俺は、初対面の人とどこまで初会話を続けたらいいのか分からず少し困ってしまい、間を置いた。

凜はその俺の戸惑いを察知し、複雑な微笑みをたたえて、

「あら、長話になってしまって！」

と言い、



「またお会いするかもしれませんね。Bye for now っていう感じですかね」  
と続け、「では」と言って大蔵運動公園の方へと走り出した。

「じゃあ。」

俺は「また」をつけないで別れの挨拶をした。

「俺もそっち方向なんだけどな。」

### <その3>

凜が大蔵運動公園から砧公園へ西から入っていき、公園一周というようなコースをとるとすれば、それは成城からは相当な距離になる。もちろん成城でも1丁目の世田谷通り近くなればそれほどでもないが、なぜか俺は彼女がその辺りの住人とは思えなかった。

凜には少し「バタくさい」感じがあった。古い形容詞だが、「ハイカラ」とするのはもっと古い。「帰国子女風」というのが一番適当か。1975年発表の Evil Woman を知っている、愛聴しているとすれば、1960年代生まれかとも思えたが、それでは実際の容貌風体とはあまりに不釣り合いだ。おそらく1980年前後の生まれではないのか。

なにしろ笑顔が実に<西洋風>に感じた。日本列島人なら、初対面の者に掛ける笑みは微かだ。笑顔ばかりでなく、少し大袈裟めな表情の作り方が印象に残る。快活そうで、しかも知的な風貌—

熊野信仰者の親父によって「熊(ゆう)」と名づけられたことを話した時の、interesting なことへ真剣な反応をした彼女の表情には、まさに知的に<凜>たるものがあつた。

俺は建ったばかりの大規模賃貸マンションを右手に見ながら、大蔵運動公園へと歩いて行った。この建物の住民の数は、世田谷区砧地域の人口増に相当貢献するだろうと思いつつ。そして砧公園利用者がさらに多くなってしまうのを若干憂いつつ。

また凜と出くわすという予感があった。大蔵運動公園に入れば、砧公園方向の東へ行く道が2つあるのだが、凜が砧公園を一周して戻ってくるとして、どちらの道でより出合いそうかをチラリと考えた。

「いや、より出くわさない方を考えるべきじゃないのか。」

俺はそう心の中で言った。

「お前、彼女に関心持ちっちゃったな！やめとけ。」

頭の中、自分で自分を制する声がした。

それでも俺は凜ともう一回話したかった。

くだらないことだが、彼女と別れてから気づいたことがあって、それを確かめたいー

そして彼女の驚きの表情をもう一回見たいー

という気持ちがどんどん強くなっていたのだ。

するとどうだ、凜がテニスコート横曲がり角から姿を現した。

あと十数秒で鉢合わせだ。

凜はもうすでに笑顔になっている。

俺に気づいたのだ。

俺も微笑み返しだ。

「やあ、またお会いしましたね！」

「あら、クマさん、いいえ、Brさんもこちらに？」

凜は足踏みをしながらそう言った。

俺はかなり激しめに笑った。

「いい機会だ、凜さん。お尋ねしますが、ELO のリーダーが Jeff Lynn で、その  
<リン> つながりでELO のファンだとか？」

凜は足踏みをやめ、一笑してから汗を拭きつつ、

「それは関係ないですよ」

と言った。

「音楽の趣味は父の影響です。父は大の Beatles ファンで、Jeff Lynn も Beatles ファン、特に George Harrison と仲が良かったんでしょう？しかもストリングスを使うロックが好きなんですよ、父は。」

「ほう。」

俺はかなり感動してしまっていた。

凜の父親はどんな人物か知る由もないが、俺と音楽嗜好がかなり近い。

そういう男性の娘なのか、凜は、と。

「Evil Woman、父がよくピアノを弾く真似をしながら、腰をふりふり踊りながら、幼い私の前で唄ったりして。そしてね、凜、お前はこの歌の女みたいになっちゃダメだぞ、なんて言ってたことがあったような。もちろん私はその女がどういう女なのか幼いからちっとも分からなかったんですけどね。父は、『そう言えば凜と Jeff Lynn、偶然の一致だな』とも言っていました。私の名前は、新宿区に住む母方の

祖母がつけてくれたんだそうです。」

「そうだったんですか。」

俺は「もう何も言うことはない」と思うほど、満たされた。

「ありがとうございました。＜また＞偶然お会いできるとうれしいです。」

俺はそうってお辞儀した。

「B rさんは、ここのお近く？」

凜が訊いてきた。

「＜僕＞は、砧です。8丁目です。」

凜はしばらく頭の中の地図上で検索しながら、

「ああ、成城2丁目と仙川を挟んで隣り合う？」

と言った。

「はい。」

「私の家、2丁目なんです。」

俺はなんだか身体が痺れるような感じがした。

#### <その4>

「成城2丁目の、どちら辺りなんですか。」

俺は思わずさらに突っ込んでしまった。

凜は怪訝そうな表情は一切見せず、むしろハキハキと、

「DCMってご存知？」

と言った。

「ええ、昔東宝日曜大工センターだったー」

凜は派手に笑って、

「古いですね。いつの頃の話でしたっけ？二千・・・」

「2010年までそうだったんじゃないかな。その後『くろがねや』になって。」

「ええ、そうでしたね。」

「そして今はDCM。DCMって何の略なんだろう。」

「Demand Chain Managementですよ。」

「え？」

俺は凜がその企業についてちょっと詳しく知り過ぎじゃないかと思ったし、あらためて英語発音のnativeぶりにも驚いていたー  
いやむしろ気後れするほどだったー



俺が憧れる美しい British アクセントだったから。

「ぼ、僕は Daiku Center Moto (大工センター・元) かと思ってました！」

凜はポカンとしていたが、意味を解するや否や腹を抱えて涙を流さんばかりに笑った。

そして笑いがやっと収まって、

「その<大工センター・元>に比較的近い方の2丁目です」

と目頭を押さえながら言った。

俺はすぐにあの辺りかと思った。凄まじい豪邸街だ。

「すみません、立ち入ったことまでお尋ねしてしまって。」

俺は謝って、「それじゃ、今度こそまた」と言った。

「ええ、また。」

凜が応えた。

「砧公園、今紫陽花がとてもきれいですよ！」

と付け加えた。

\*\*\*

俺は考える最も若い Beatles 世代だ。5歳のとき彼らのデビュー曲をリアルタイムで聴いた。8歳上の長兄の受け売りだったが、以来その「Fab Four」の影響を受け続けてきた。いや、人生を決定づけられたのだ。

特に John Lennon からの影響を受けた。彼は、「天国も地獄も、国も、殺したり死んだりする必要も、宗教も、私的財産も、貪欲、飢餓もない世界を」と訴えた IMAGINE を、そして「The world is so wrong」という歌詞がある Happy Xmas (War Is Over) を 1971 年にソロになってから発表しているが、その時俺は多感な時期に入りつつあり、「やはり Beatles は本当に peace & love のバンドだったのだ」と感激し、<Beatles 教>の信者と言うべき者になった。

「世界はおかしい」、「世界は間違っている」ー

自由抑圧のソ連が崩壊し、多くの人々が抱いていた共産主義や社会主義への憧憬は雲散霧消したが、だからと言って放埒な自由主義経済がその多くの人々を救うはずもなかった。貧富の差は拡大し続け、大資本による途上国などでの搾取は止まらず、OECD 加盟国でも二極化が甚だしくなり「中流」と思っていた人々がどんどんと貧困化し、ホームレスや薬物中毒、無差別殺人、自殺の蔓延・増加は大問題になっている。

凜が住むという成城2丁目は全体が高級住宅地だが、その中でも呆れるほどの豪邸が立ち並ぶ地区がある。そこは「DCM」というホームセンターから小田急成城学園

前駅方向へ数百メートルというところに在る。凜はまさにその地区に住んでいるらしい。きっと藤原家は大富豪だろう。

俺は単純に知りたいと思ったー

凜のお父上が Beatles ファンなら、「Imagine no possessions」と IMAGINE で、「The world is so wrong」と Happy Xmas (War Is Over) で John が歌ったことをどう思っているのか。そしてもちろん、凜も。

いやいや、Beatles ファンだからその歌詞に必ず共感し、あるいはその通りに行動せねばならないなどと俺はちっとも思っていない。John 自身も自分の偽善性に気づいていた、あるいは自嘲していたし、Paul なんかは世界の大富豪の一人で、「Peace, Love & Money」と言っても矛盾しない存在だ。

しかし、例えば<地球人>が抱える貧富の極端な格差、経済的不平等について、Beatles あるいは John のファンであるなしに関わらず、どう考えているのか、どう対処すべきと思っているのかー

それについて知りたいと思うのだ。無責任なことに俺には解決法なんてちっとも浮かばないけれど。

\*

凜との俺にしては劇的な出会いをした翌日、小雨が降る早朝4時、「今日は凜さん、さすがに走りには出ないかな」と思いながら、俺は傘をさしていつも通りに家を出た。

それでもやはり彼女と出会うことを期待していた。俺のウォーキング・コースは数通りあるが、前日と同じコースを取ったのだ。

『七人の侍』のいくつかのシーンが撮影された仙川べりを歩いていた。ここに来ると必ず、志村喬さん、三船敏郎さん、そして大好きな「久蔵」の宮口精二さんのお顔が浮かんでくる。その映画の戦闘シーンほど激しい降りではなくとも、雨の中、ますますかの偉大な俳優たち、そして黒澤明監督のことが慕わしく思えた。東宝スタジオから数百メートル下流の地点だ。

夢想状態で茫々としていると、「おはようございます！」という元気のいい声にハツとするー

凜だ。

<その5>

「ああ、凜さん！おはようございます！」

彼女はいわゆる「シャワーラン」の格好で、雨をひとつも苦にしていない様子だ。

「すごいですね、雨ん中でもいつも通りで。」

俺がそう言うと、足踏みしながら凜はにっこりと笑って、

「ずぶ濡れです。でも雨の日の jogging はそれなりの楽しみがありましてね」

と言った。

「紫色の花々が輝くでしょう、雨の日って。」

「輝く・・・。」

「ええ、特にこの季節は紫陽花。紫陽花って本当に色も形も千差万別で、私しょっちゅう引っかかってしまうんですよ。足踏みしながら花を見て。まるでホバリングしているハチドリみたいに。」

なるほど、いい比喻だと俺は思いながら、

「砧公園内の世田谷美術館周辺に今すばらしい紫陽花が咲いていますよね」

と言うと、凜は、

「そうですか。どんな紫陽花？」

「白いの、ちょっとピンクの、それからしっかり赤紫の花の pompon が同じ株から咲いているんですよ。」

「まあ！じゃあ、探してみようかな。」

俺は、その凜の無邪気とも言える表情や声の調子に、なんだかたまらず不躰で大胆になった。

「あ、あの、凜さん、もしよかったらいつかお話しする機会は持てませんか。」

なんと驚くべきことに、凜は全く動揺する素振りも見せず、

「いいですね！」

と顔をキラキラさせて返事をするのだった。

「あ、あの一」

俺は大胆、不躰な態度から一変気弱な少年のようになって二の句を繋いだ。

「実は、凜さんにお聞きしたいことがあって。お互いのジョギングやウォーキングの途中で話すようなことでもなくて。」

凜は幼稚園の保母さんのようにやさしい笑みを浮かべて、

「私、時間がありますから大丈夫ですよ」

と応えた。

俺は焦燥感たつぷりに早口で捲し立てるー

「僕のこと、どこの馬の骨か分からないでしょうけれど、とりあえず砧8丁目に住むミュージシャン、しかももう還暦を過ぎていて、何かギラギラした出世欲を持って音楽をやるなんていうフェイズはとっくに過ぎていて。今は砧を僕の終の住処として、歌うたいの最終盤に総決算で言うかー

言葉が貧困だな、ええと、集大成・・・そんな大したもんじゃないかー」

凜はクスクス笑っている。

「なにしろデビューしてから40年、今の境地を歌にして、いつあの世から呼ばれてもいいようにって、そんな感じでしてね。なお、今は独りです。」

そう言って俺は「しまった」と思った。「最後はないわ。今言うようなことじゃない。そんなことを言うこと自体が嫌らしい」と感じ、顔が熱くなった。

俺は気を取り直して、

「ミュージシャンなんて大概はだらしない生き方をしてしまうし、僕も例外ではないんですけど。でもだからこそ自分の人生を見つめる機会は多かったです。その、自己の行いを見つめてアウトプットされるものが歌でした。そして結局思うんですが、私の歌とは一貫して All you need is love 精神の発露なんだと。」

凜は足踏みをやめていた。

「その love って、動詞なんですよ。」

凜は呟くように言い、俺は衝撃を受け、心の中で、

「え？名詞だと思ってたし、そう取ってもおかしくはないけれど、動詞？そうか、All I've got to do is call you on the phone の call と同じことか！」

と凜の言葉を反芻し始めていた。

「Nothing you can sing that can't be sung ー」

凜は「can't」を美しいイギリス英語の響きで発音して John の詩を誦じた。

「歌えるもので歌い得ないものは何もない、ですよ。その前の歌詞は『することができてされ得ないものは何もない』。だから、『<愛し> さえすればいい』なんですよ。」

俺はしばらく呆然として立ち尽くしていた。

そして徐に傘の下に凜を入れた。

All You Need Is Love 「愛こそはすべて」という邦題は決して誤りではない。

しかし「Love」を「愛」という名詞ではなく、「愛すること」という<(toなし)

不定詞>で動的に訳すことー

そういうふう解釈する凜の精神に俺は本当に感動した。

<その6>

「愛しささえすればいい」あるいはより直訳的に「必要なのは愛することだけ」—そう解釈するには、タイトルは「All You Need to Do Is (to) Love」となるはずだろうが、そんなことはこの際どうでもいい、と俺は思った。必要なのは「愛」という抽象名詞ではなく、「愛する」という行動なのだ！

俺と凜は相合傘になってしばらく歩いた。黙ったままだったが、それぞれが普段考えていることを言い合える、あるいは口にする意味がある相手が見つかったといううれしさに、おそらく凜も浸っていたのではないか。

まもなく、仙川崖線をトラバースする緑滴る坂道を、二人は登り切った。

「これ、名刺です。」

俺は財布から名刺を一枚取り出し、凜に手渡した。凜は防水加工されたウェストバッグにそれをしまう。

「ありがとう。身体が冷えてしまうので、この辺で。」

凜はそう言って、大蔵運動公園の方へ再び走り出す。ほんの少しだが、彼女の所作・動きに後ろ髪を引かれる想いが滲み出ているのを俺は観てとった気がした。

俺は彼女が行った方向へ歩き出さなかった。「今日はいい」と呟いた。

\*\*\*

凜からメールが来たのは、雨があれから数日続いた後だった。熟慮し、逡巡したのかもしれないと俺は思った。あるいは風邪を引いてしまっていたのかとも。俺はあれからは早朝散歩には出ないでいたのだった。

もちろん俺は待ち侘びていた。いい歳こいて、まるで中学生や高校生が送ったラブレターへの返事待ちをする気分だと自嘲してもいた。それでも心の中は欣喜雀躍、そして実際小躍りした。

メールにはいつ会えるとかは書かれておらず、ただ「お会いできる日を楽しみにしています」とだけ。

俺はこう返事した。

「メールありがとうございます。」

私は土日はほぼいつでも都合がつかます。凜さんから日時場所をご提案ください。

ただできれば都心は避けていただけると幸いです。人混みはすっかり苦手になりました。

飲食店でとかではなく、仙川や野川散歩でも構いません！」

凜からはおよそ1時間後に返事が来た。

「ご返信ありがとうございます。雨でウォーキングはお休みされていましたか？

さて、仙川・野川散歩、いいですね。次の土曜日、もし晴れたなら野川沿いのふれあい広場でお会いするのはいかがでしょう。サンドイッチか何か作って持って行きます。最終確認は金曜の夜に。では、また。」

<その7>

土曜のデートまであと数日ある中、俺は久しぶりに早朝ウォーキングで成城方面へ足を向けた。

梅雨の早朝独特の冷気があったが、すぐにひどい湿度で汗が出てくる。

例のDCMの西側の入り口前を通過し、成城2丁目へと入って行く。

「藤原」の表札がある豪邸を見つけられるかー

少々趣味が悪い行為ではあるけれど、ウロウロと歩き回った。

あった。

以前この邸宅の前を通ったであろうけれど、いつも歩く道とは一本駅寄り、北西側の道沿いなので、記憶は薄かった。

近隣の大邸宅、豪邸群の中、勝りこそすれ決して劣らない規模、そして造りだ。

まるで地層が重なっているかのように見える、横筋がいくつもある千種色の門の壁—中央の玄関は数寄屋風で、格子戸だ。その向かって右肩の壁に黒く縁取りされた銀色の切り文字で「Fujiwara」とある。その字は毛筆で書かれたようで、職人がその風合いを見事に切り出している。それを含め、<家の顔>の和洋折衷ぶりは絶妙で、全体の品の良さに俺は嘆息を吐いた。

敷地はおそらく最低でも300坪はあるだろう。この大豪邸を見てしまうと凜やその家族はあの鎌足、不比等以来の大貴族の末裔かとも疑うが、その藤原氏、直系筋などはとうに違う家の名を持っていて藤原を名乗る家は全くないから、そういうことはないはずだ。しかし、貴族の血筋であろうがなかろうが、現代日本の経済的成功者であることに疑問の余地はない。それでいて成金趣味が一切ない家の佇まいが、直接凜の人となりのようだと俺は思った。



まだまだ知り合ったばかりなのだが、凜とはそういう女性なのだと確言できた。帰国子女風ではあるが、まさに凜とした<伝統的>日本風の顔立ちで、彼女がもし若い頃に神社で巫女さんを務めていたら、参拝の男たちが皆見蕩れていただろう清楚さと気品、そして明朗さを<いまだに>ほぼ保っているのだ。そしてさらには英国の上流社会で身についたに違いない「posh」さが—  
英語のアクセントばかりでなく、服のセンス、着こなし（とは云え、ジョギングでの服装でしかないが）、物腰にも—  
渾然一体となっているのが凜なのだ。

俺は凜の家を確認すると、早々に彼女と出くわさない方向へと歩き出した。  
土曜日に凜と会って、俺は本当に、Johnも自嘲した「財産などないと想像する大富豪 (a billionaire who imagines no possessions)」が「貪り (greed)」をどう考え、どう対処するのかを聞きたいのだろうか。

そう、やはり聞きたいのだ、と思った。  
それは、彼女なら、凜なら、何かしらの答えを持っていると確信するからだ。そしてそれを聞いて、俺は前進できるのではないかと期待していたのだ—  
IMAGINEの世界の、Johnが「I'm not the only one」と言った、その、彼を独りにさせない人間として、歌うたいとして。

### <その8>

待ちに待った土曜日は、天気予報通り梅雨の中休み、驚くほどの「ピーカン照り」となった。

晴れたのはいいが、昨今の日本、そして東京では、六月でも耐えられぬほどの暑さになるのは必定だった。昨日まで予報が外れたりしたら雨宿りをどうするかと心配していたが、今や強烈な日差しから二人を守る shelter をどこに求めるのかが大きな問題だと俺には思えた。ふれあい広場には藤棚を屋根にしたベンチが置いてはあるが、壁は全くないから長くいたら悲惨なことになってしまう。また、<先客>がいたら、途方に暮れるしかない。

「そうか、その時はその広場脇の野川に沿った緑道にある木陰のベンチがある！」  
いいことを思いついたと喜んだが、すぐにその場所の難点を思い出した—  
蚊がいるのである。

なぜ俺はそのことを知っているか。もちろん、その世田谷区喜多見にある区立公園に隣接する狛江の東野川というところに長く住んでいたのだから、それぐらいの知

識経験があつて当然と言えば当然だが、その木陰のベンチにそれなり長く座らねば知ることもまずない<蚊禍>である。そう、もう相当昔のこと、俺はある女性とそのベンチに長く座っていたことがあったのだ。

俺は防虫スプレーをポシェットに入れた。

\*

前夜確認し合った待ち合わせ時刻午後0時ちょうど、俺はふれあい広場の階段下に着いた。

すると、

「ユウ（熊）さん、Brさん！」

と凜が階段の踊り場のところの手摺から顔を出して俺を呼ぶのだった。

「ああ、凜さん！」

俺は一瞬、Romeoの気分とはこういうものではないか、と思った。一日千秋、なんだか泣けてくるような恋しさだった。

「おいおい、六十男がいったいどういう了見だ」一

俺はすぐにそう自省して、凜には過度に映るであろう我が感激の表情をフラットにする。

踊り場で互いに日本人らしい挨拶を交わして、天気のことなどを話しつつ広場に入る。入ってすぐ左手の、例の藤棚が屋根になっているベンチを見るとバスケットが置いてあり、俺は、

「もしかして、席取りの目印にしたの？」

と訊いた。

「盗られちゃったかもしれないじゃないですか。」

俺が笑いながらそう言うと、凜は、

「見て」

とバスケットの中を俺に覗かせた。内容物の上に紙が置かれていて、そこには

「どくいり きけん たべたら しぬで」

と太めのサインペンが何かで書かれていた。

俺は絶倒しそうになった。

腹を抱えて笑うべきこのユーモアではあるが、踊り場で俺を待っていたこと、俺に声をかけたときの眩しいとしか言いようのない笑顔一

この連続した愉悦の後、こんな無邪気なことをする凜の愛らしさを目の当たりにして、俺はまだ束の間二回しか会っていないこの女性の<奥深さ>、測り知れない人

間性、女性性を思い知った気がして、笑うどころか溜息が出るのだった。

凜はその俺の態度に怪訝そうな眼差しを向けて、  
「ユウさん？」  
とだけ言った。

俺はハツとして、咄嗟に両目を吊り上げて、  
「キツネ目のおとこ〜！」  
と戯けて、  
「そうしてキツネは、ええ子はこんな悪戯してはいかんがな、とコンコンと説教する！」

そんなくだらないことを言ったのだが、凜は大笑いして、  
「うまい！」  
と本当に感心しているという表情で言って、ハハハツと笑った。  
俺はなんだか恥ずかしくなって、  
「今はフジの葉陰にはなっているけれど、もうすぐ日光が直射しますよ」  
と真面目そうに指摘して、そうになったら広場の下に降りて、午後から日没まで完全に日陰になる野川脇のベンチへ行きませんかと言った。  
すると凜は、  
「ええ。でも、あそこは長時間いると絶対に蚊に刺されちゃうんですよね」  
と言うのだった。

<その9>

「でも、あそこは紫陽花に囲まれるようで、すてきですよ。」  
凜が、タッパーにはち切れんばかりに入ったサンドイッチを俺に勧めながら言った。

俺が目を輝かせ「これはうまそうだ。いただきます！」と手を出そうとし、しかしすぐに手指をきれいにしなければと気づいて躊躇するや否や、凜は紙おしぼりを手渡してくれた。

「紫陽花、好きなんですね。」  
俺は手を拭きながら言った。  
「なんかねー」

凜はマグボトルからめいめいのカップにコーヒーを注ぎながら呟くように言った。

「どこかで読んだんですけれど、アジサイを表す漢字・紫陽花（しょうか）は、中国

ではライラックか何かを意味したのを、名前は忘れたんですけど日本の平安時代の、  
 だったかしら、とにかく大昔の学者が間違っアジサイに宛ててしまったんですつ  
 て。」

「ほお。」

「梅雨に盛りを迎えるあの花は、ご存じのとおり、学名でも一般名でも  
 hydrangea、水=雨との関連で名付けられているじゃないですか。なのに日本の  
 当て字だと太陽の『陽』の字を含むって、変だと思いませんか？」

「そこなんですよ、凜さん！」

俺は少し興奮して応えた。

「先日紫陽花の話をちょっとしたとき、凜さん、雨の日には紫色の花が輝くって言わ  
 れましたよね。実は僕もそう思っていて。でも雨の日には紫色の花が『輝く』って言う人、  
 僕と同じように感じる人とは、会ったことがなくて、凜さんのその言葉、噛み締め  
 ちゃってね、あん時。同じ心なる人っているんだって、しみじみ。」

凜は柔らかな笑みを見せてくれた。

俺は彼女と見つめ合った。

『『同じ心なる>人』って

紫ならぬ、清少納言の・・・。』

凜はそう言って、少し間を置いてから、

「その『なる』を『ならん』としたのが、吉田兼好ですね」

と囁くように言った。

俺は仰天した。本当に空を仰いだ。

「ゲロゲロ。」

俺はそう<鳴いた>。俺にとって超弩級の<驚き感動詞>だ。

凜は目を丸くして俺を見るー

「ゲロゲロって、ユウさん、カエルになっちゃったのお？」

「紫陽花が好きすぎて、ずっとその葉っぱで雨に打たれているのが好きなアマガエル  
 です！」

俺はさらに戯けてそう言ったのだが、揺さぶられた心が次の衝動を振り出す。

「You are the beat of my heart. The light delicate blush of the  
 petals reminds me of a beating heart, while the size could only  
 match the heart of the sender!

(汝は我が胸の鼓動なり。明るくほのかな紅色の花弁は脈打つハートのやう、かたや  
 その小さきことは、送り手の心臓に匹敵するのみならん！)」

俺がそう Tan Jun Yong の詩を誦じると、今度は凜が空を仰いだ。

<その 10>

サンドイッチを食べ尽くす頃には、二人は異常な蒸し暑さに耐えきれなくなっていた。俺は防虫スプレーを凜に見せて、「下に行きましょうか、例のベンチへ」と言った。凜は俺の用意周到さに感心したと言って、にっこり頷き、腰を上げた。

そのベンチからは、主に成城4丁目の、国分寺崖線の高台に建つ豪邸群が野川を挟んで正面に見える。

二杯目のコーヒーを飲みながらその成城の丘を見ていると、早速蚊の気配がした。

「来ましたか、蚊？」

俺は凜に訊いた。

「ええ、でもスプレーが効いてますわ。」

凜はそう返事して、それでも左脚の脛の辺りを軽く叩いた。

「いずれにせよ、ここに長居は無用かもしれませんね。」

俺はそう言い、頃合いだと思った。

「凜さん、こんな大きな問題についてあなたのご意見を伺うタイミングでも、私とあなたの関係性でもないと自覚していますがー」

俺はそこまで言ってコーヒーを少し多めに啜った。

「あの豪邸群。」

俺は視線で凜にその方向を示した。

「黒澤明監督の『天国と地獄（英題 High and Low）』は欧米でも高く評価されている映画なのですが、山崎努さんが演じた誘拐犯は、丘の上の高級住宅をその下の貧民街からずっと見上げてきた貧しい研修医なんです。」

「ええ、観たことがあります。」

凜もコーヒーを少し多めに口に含んだ。

「私のアメリカの友人たちにも熱狂的な Kurosawa ファンがいて、中でも filmmaking を専攻していた友人にとってはほとんど Akira Kurosawa は神でした。私が東京では Toho Studios の近くに住んでいると言ったとき、彼に随分羨望されました。」

俺は「それはそうでしょうね」と言い、いよいよ本題に入る

「実は僕、John Lennon の、『Imagine no possessions』という歌詞にずっと拘ってきましてね。そのこだわり、あるいは<くだかまり>は、まるでその研修医の、丘の大邸宅を見る時の気持ちに近いんじゃないかって。大邸宅に住む世界でも指折りの大富豪が、妻の Yoko さんも Lennon 家の資産運用で忙しいなんていう中、どうしてあんなことが歌えたんだろうって。もちろん言行不一致なんて人間には当たり前のことでしょう。John & Yoko が聖人君子であるはずもない。しかしその hypocrisy を John を殺害した犯人は赦せなかったと言っています。John に傾倒し、神格化さえしていたからこそ、赦せなかったんじゃないか。僕はもちろん犯人を赦せない。勝手に神格化なんかしやがって、と思う。けれど、Gimme Some Truth って歌った本人が、財産なんてない、貪りなどない世界を想像してごらん、私は夢想家と言われるかもしれないが、独りじゃない、なんて歌ったんですから、僕は少年としてリアルタイムで聴いたけれど、これが本気なら、John は神になったと思いましたよ、実際。」

「John は『I wonder if WE can』ってライブで歌っていますよね。レコードでは you のところで、we と」  
と凜が言った。

「そこに John の照れ、あるいは自嘲がありますよね。『you』とスタジオで歌った彼は本当にその時は holy な存在になっていたんじゃないかしら。そして日常の自分のだらしなさの自覚から、生で人前で歌うときには『we』と歌わざるを得なかった。そういう John が私にはむしろ好ましい、あるいは愛おしいんですけどね。」

「凜さん、あなたも豪邸に住んでいらっしゃいますよね、成城2丁目だー」  
俺は愛を告白するのと同様の勇気を振り絞って言った。  
「富裕な人は、この経済格差が極端になった、あるいはなりつつあるこの今の社会、世の中で、どうそのことを認識して行動すべきなんでしょうね。」

「それが日々、私に課せられた命題なんです。」

凜はキツパリと返答した。

「私は太宰治に似ているって思います。」

「太宰？」

「太宰は大地主の実家の援助を相当長くもらい続けましたよね。小説家としてなんとか売れ出すまで、当主の長兄に嘘をつき続けて。しかもその後も自堕落と批判されるような生活態度ゆえ他者からの借金は多かったみたいです。私は嘘はつきませんでしたけれど、実家の財産を元手に夢を追った点では太宰と変わりません。自堕落も、正直、ありました。」



俺は固唾を呑んだ。

凜は続けたー

「太宰は帝大生時代、共産主義運動にも関わりました。ブルジョアの息子・娘が、その幸運な〈親ガチャ〉に引け目を感じるって、よくあるパターンじゃないかしら。John は親ガチャでは散々だったかもしれませんが、Paul、George、Ringo という天才たちと同じ Liverpool で真の意味で奇跡的に出会って、おそらく音楽史上至高の幸運に恵まれたけれど、バンドから去ったとき、ビートルズ時代の自分を『I was a warlus』、そして『Now I'm John』と歌って、それからまもなく IMAGINE を作り、歌うんですね。〈No possessions〉の世界を想像する自分になっていたんです。」

「ええ。」

俺は太宰と John Lennon が並列に語られているという事実の新鮮さに興奮して聴いていた。

「それでもー」

そう言って、凜はコーヒーを飲み干した。

「自分の思いと行いが一致しない、辻褄が合わないというもどかしさを持たない人ってきつといないと思うんです。太宰も John も、もどかしさを常に抱えた日々だったんじゃないかしら。私も毎日、自分はロクでもない人間だなんて思っています。」

「ぼ、僕もですよ！」

俺は慌てながら即座に同意した。

「私ね、一人っ子なんですよ。」

凜が長く暗かった表情を、パッと、まるで電灯が点ったかのように明るくさせて言った。

「私、子どももいないし、私がこの世を去ったら、全財産を寄付するつもりなんです。それで私のもどかしい想いが晴れるわけではないですし、経済格差という大問題への解答にもなっていないのですけれど。」

俺は心打たれていた。

やはり凜は〈立派な〉人物だったとしみじみ思った。

その感動が続いているのに、俺はまた勇気を振り絞って〈次の質問〉をした一しなれば済まないという気持ちが抑えられなかった。

「凜さん、このベンチで以前、長く話し込んだ人は誰ですか。」